

秦漢期の序と著作のあり方

（受付一九九九・四・二）

嘉 瀬 達 男

抄録… 秦漢期の書物に付された序について検討を加え、當時の著作のあり方の考察を試みたものである。秦漢期の序には様々な形態があるが、小論の中でも、書中の各篇に對して述べられた序を取り上げた。それは後の目録・目次の役割を擔い、各篇の梗概や執筆の目的、更にはその篇への自讚を記したものである。文章は四字句が多用され、様々な修辭法が用いられている。このような序はやがて消滅してしまつたが、それは各篇の本文と序の内容が重複したためと考えられる。だが、内容が重複するにも関わらず、雕琢を凝らし自讚を交えて序を著したところに、著者がその書の價値を高めようとする意圖が見出せた。そして、このような行爲を行なう程この時期の著者は、自作に對する自負や思い入れが強かつたのではないかと考えられた。この自負や思い入れの深さの表れているのが、序の存在なのである。

索引語…序、『史記』太史公自序、『法言』序、『漢書』敘傳、『潜夫論』敘録

はじめに

は、序について些か考察を加え、當時の著述のあり方を探る一助としたいと思う。

一、序と篇序

序は『文心雕龍』論說に「序は事を次ぐ」とあり、『文章辨體』では「爾雅に云ふ、序は緒なり、と。……其の次第を言ひて序有り、故に之を序と謂ふなり」と言われているが、その後、序は著述に付随したものと考えられ、當時の著述のあり方を探る上で、貴重な資料を提供しているにも関わらず、十分に検討を加えられていない。そこで小論

ひとまず秦漢期に序（敘）と冠された文章を列挙してみたのだが、書物に對して付されたものを對象とし、その書の執筆編纂に直接関わつた者の文に限定することにした。そうすると、以下の九篇を見

出すことができる。¹⁾

1、呂氏春秋・序意 2、周易・序卦 3、史記・太史公自序

4、法言・序 5、漢書・敘傳 6、說文解字・敘

7、潛夫論・敘錄 8、風俗通義・序 9、前漢紀・目錄并序

以上は全て當初より序(敘)字が冠されていたとは限らないが、概ね現在の序に相當していると考えられる。

小論で特に取り上げたいのは、これら九篇のうち3『史記』太史公自序、4『法言』序、5『漢書』敘傳、7『潛夫論』敘録に見られる序である。この四篇で特異なのは、以下のような各篇に對する序(以下篇序と略稱する)の部分である。まず、これらの篇序の文體に注意すれば、その特異さが理解されるだろう。

『史記』太史公自序

維昔黃帝、法天則地、四聖遵序、各成法度。唐堯遜位、虞舜不台、厥美帝功、萬世載之。作五帝本紀第一。

維れ昔 黃帝、天に法り地に則り、四聖 序に遵ひ、各々法度を成す。唐堯 位を遜り、虞舜 台はず、厥れ帝功を美め、萬世之を載く。五帝本紀第一を作る。

『法言』序

天降生民、控侗顛蒙、恣于情性、聰明不開、訓諸理。誤學行第一。

天 生民を降すに、控侗顛蒙として、情性を恣にし、聰明 開けず。諸れに理を訓ふ。學行第一を誤す。

『漢書』敘傳

太宗穆穆、允恭玄默、化民以躬、帥下以德。農不供貢、辜不收孥、宮不新館、陵不崇墓。我德如風、民應如中、國富刑清、登我漢道。述文紀第四。

太宗 穆穆として、允恭にして玄默、民を化するに躬を以てし、下を帥あるに德を以てす。農に供貢せず、辜するも收孥せず、宮は館を新たにせず、陵は墓を崇くせず。我が德は風の如く、民の應ずること中くさの如く、國富み刑清く、我が漢道のほを登す。文紀第四を述べ。

『潛夫論』敘録

先聖遺業、莫大教訓。博學多識、疑則思問。智明所成、德義所建。夫子好學、誨人不倦。故敘讀學第一。

先聖の遺業、教訓より大なるは莫し。博學多識にして、疑はしきは則ち問はんことを思ふ。智明の成る所、德義の建つる所なり。夫子 學を好み、人に誨へて倦まず。故に讀學第一を敘す。

一見して判るのは、殆どが四字句で構成され、最後が「」を作る」などといった言い方で結ばれていることである。ここには『史記』太史公自序、『法言』序、『漢書』敘傳、『潛夫論』敘録の中でも典型的な部分をそれぞれ引用したが、このような文體が『史記』では百三十篇分、『法言』では十二篇分、『漢書』九十九篇分、『潛夫論』では三十五篇分ほぼ連なっているのである。²⁾これは極めて異例なことである。序の中でも篇序には、明らかに共通した一つの文體が用いられていると言えよう。

では、篇序とは、序全體の中でいかなる位置を占めているのだろうか。

そもそも序は、書物の最後に付され、書物全體の字數を記したり、今見た通り篇名を全て列舉した篇序を備えたりするものであり、その書物の編集を終えた最後の段階で編纂されたものと思われる。内容は、その書物の要旨を説くが、この時期の序は特にその書物のもつ意義を強調し、自ら讚辭を添える傾向が強い。『史記』太史公自序に「之を名山に藏し、副は京師に在き、後世の聖人君子を俟つ」と言い、『漢書』敘傳が「凡そ漢書は……雅故を函み、古今に通じ、文字を正し、惟れ學林なり」と言うように、撰者達の自作に對する強い自負に基づく讚辭には、目を見張らせるものがある。

このように序は書物全體に對するものであり、篇序は各篇に對するものである。この二つの序の關係を確認するために、『潛夫論』敘録の構成を見ておきたい。

夫生於當世、貴能成大功、太上有立德、其下有立言。闡茸而不才、先器能當官、未嘗服斯役、無所效其助。中心時有感、援筆記數文、字以綴愚情、財令不忽忘。芻蕘雖微陋、先聖亦諮詢。草創敘先賢、三十六篇、以繼前訓、左丘明五經。

先聖遺業、莫大教訓。……故敘讚學第一。……敘志氏姓第三十五。

夫れ當世に生まれては、能く大功を成すことを貴ぶ。太上は徳を立つることに有り、其の下は言を立つることに有り。闡茸にして不才、先に器として能く官に當たるも、未だ嘗て斯役に服して、

其の助を效す所無くんばならず。中心 時に感ずること有りて、筆を援き數文を紀し、字以て愚情を綴り、財かに忽忘せざらしむ。芻蕘は微陋なりと雖も、先聖も亦た諮詢せり。草創して先賢三十六篇を敘し、以て前訓、左丘明五經を繼ぐ。

先聖の遺業、教訓より大なるは莫し。……故に讚學第一を敘す。……志氏姓第三十五を敘す。

『潛夫論』はその書名で作者自身を「潛夫」と呼んでいるように、非常に謙虚な立場から著された書物である。その結果「中心 時に感ずること有りて、筆を援き數文を紀し、字以て愚情を綴り、財かに忽忘せざらしむ」と備忘を目的とするとか、自分を野人「芻蕘」に喩えたりしている。しかしながら「草創して先賢三十六篇を敘し、以て前訓、左丘明五經を繼ぐ」と、「五經」を繼承するとまで言うのはやはり撰者のもつ自負の表れであり、結局『潛夫論』を自讚しているのである。この部分はほぼ五字句で構成されているが、その後、先に引用した篇序が第一篇からこの敘傳篇を除いた第三十五篇まで順に配置されて終る。

では、このような篇序は、果たしてどのような目的をもって序に録されているのだろうか。

二、篇序と目次

はじめに秦漢期の序を九篇あげたが、そのうち篇序を含むのは四篇であった。他の五篇には小論で言う篇序がないわけだが、實は篇序と

その関わりが深いと思われる、篇名目録と思しき部分をもつものがある。それは、2『周易』序卦、6『説文解字』敍、9『前漢紀』目録并序である。

『周易』序卦は、序卦と言う通り六十四卦配列の序次の必然性を説く篇であるため、篇名ではなく卦名を全て一つ一つ文中に擧げながら、相互の連關を述べているが、『説文解字』敍は中間部に十四篇の部首字五百四十部の目録を列擧し、『前漢紀』目録并序になると、序の文の直前に篇名目録が別置されている。以下にそれぞれその一部を例示しておこう。

『周易』序卦

有天地、然後萬物生焉。盈天地之間者唯萬物。故受之以「屯」。「屯」者、盈也。「屯」者、物之始生也。物生必蒙。故受之以「蒙」。「蒙」者、蒙也。物之釋也。物釋不可不養也。故受之以「需」……

天地有りて、然る後に萬物生ず。天地の間に盈つる者は唯だ萬物なり。故に之を受くるに「屯」を以てす。「屯」とは、盈つるなり。「屯」とは、物の始めて生ずるなり。物生ずれば必ず蒙なり。故に之を受くるに「蒙」を以てす。「蒙」とは、蒙なり。物の釋をまきなり。物釋ければ養はざるべからず。故に之を受くるに「需」を以てす。……

『説文解字』敍

……説文解字第一 一部一 二部二 示部三……説文解字第十四
……亥部五百四十

此十四篇、五百四十部、九千三百五十三文、重一千一百六十三、解説凡十三萬三千四百四十一字……

『前漢紀』目録并序

高祖一第一 高祖二第二……孝哀下第二十九 孝平第三十
凡漢紀十二世十一帝、通王莽二百四十二年……

『周易』では、「屯」「蒙」「需」卦の因循の必然を説いているが、この順序は現行本の配列の順ではない。だから目録としては、六十四篇の篇名の佚亡を防ぐほどの役割しか果たさせていない。その分因循の必然を説く目的の方が大きいのだろう。それに比べ『説文解字』と『前漢紀』が備えているのは、完全に篇名目録である。『説文解字』敍は『説文解字』の末尾第十五篇にあり、その中間部にこの目録があるため、検索用の目録としてはやや使い難い。一方『前漢紀』目録并序は『前漢紀』の冒頭に置かれ、目録の後に序の文が付されている。つまり現行の目次と變わるところがなく、目次の直後にある序文の方が、目録に添えられているようにさえ見えてしまっている。

以上のような目録が、篇序に最も近い存在と考えられる。それは、序の中にあり、全篇名を記していることから判断できるのである。ならば篇序とは、目録の一形態であったのではないだろうか。

篇序をもつ序は、この秦漢期のものが殆どである。そして時代が下ると、序は書物の末尾から冒頭へと移動する。それを示すのが『前漢紀』の序である。

秦漢期の書物には目次がなかったようであり、現存するものでは後

漢の『説文解字』と『前漢紀』の篇名目録が目次の形を備えている。

『説文解字』は末尾に目録を含んだ序をもつが、『前漢紀』は「目録并序」という表記からわかるように、目録と序が分離しつつある段階で、書物の冒頭に置かれている。現在の目次・序文と何ら變わりのない形になっているのである。そして『説文解字』と『前漢紀』以外で目録に類するのは、『周易』序卦であり、次には『史記』太史公自序、『法言』序、『漢書』敘傳、『潜夫論』敘録といった篇序があげられるのである。その結果、目録（現在の目次）は本来序に含まれ、篇序の形をとっていたと考えてよいように思われる。勿論、以上に挙げた資料が完全に原型をとどめているとは限らないし、失われた資料も多いことだろう。だから、ここに挙げた資料ばかりを特別視するのは危険だが、現存する状態から判断すれば、序の中から篇序が獨立し、目録・目次が形成されていったと思われるのである。

そうすると篇序は、序の中から生まれ、目録の形成にともない消滅してしまつたことになるが、それはなぜなのだろうか。次に篇序の内容を検討しつつ考えてみることにしよう。

三、篇序の内容と文體

1、『史記』太史公自序

『史記』太史公自序に含まれる篇序は、今とりあげているものの中では最古のものである。そのためか四篇の篇序の中では、四字句の占め割合が最も低く、他の三篇に比べ文章の裝飾性が低く感じられる。

内容は各篇執筆の経緯や目的を説くとともに、各篇の紹介といった趣きがある。例えば表の第一篇の序は次のようである。

維三代尚矣、年紀不可考。蓋取之譜牒、舊聞本于茲。於是略推、作三代世表第一。

維れ三代は尚し、年紀考ふべからず。蓋し之を譜牒に取り、舊聞茲に本づく。是に於いて略ぼ推し、三代世表第一を作る。

四字句は「是に於いて略ぼ推す」という部分だけである上、「三代世表第一を作る」の句を除くと五句という奇數句になつてしまふ。このようなことは他の三篇には殆どない。しかし三代世表は「年紀考ふべからず」という状況の下、「略ぼ推し」作られたものであるという経緯が分かり、「舊聞 茲に本づく」のであるから、讀者は舊聞を讀む時三代世表を参考にすればよいことが理解できる。

しかし實のところ、この三代世表の序は三代世表の論贊を簡略にしたものに過ぎない。論贊は「太史公曰、五帝・三代の記は尚し」から始まり、「是に於いて『五帝繫牒』『尚書集世』を以て黄帝以來共和に迄るまでを紀し世表を爲る」の文で終るが、この二文だけでも、篇序の「維れ三代は尚し」「之を譜牒に取り」「略ぼ推し、三代世表第一を作る」の部分がいり詳細に記されているのが分かる。他の篇が全てこのような状況であるわけではないが、しばしば論贊を簡略化した篇序は見出しうる。論贊と篇序の内容が重複するのであれば、論贊執筆の後、末尾に付された篇序の價值が低下することは避けられまい。つまり論贊が既に存在しているのであれば、篇序に同様の文を記す必要

はないのである。篇序が後に消滅し、目録だけになってしまった理由の一端は、このようなところにも求められるかもしれない。

ならば司馬遷は論贊を書いた後、なぜ更に重複する篇序をものしたのである。それは前述の通り、篇序には目録としての意味があったのであるから、目録に各篇の梗概を添えるつもりで撰じたものと思われる。そしてただ重複した文を添えるよりは、一覽目録として體裁が整っていた方が望ましいので、四字句を多くして篇序を飾ったものと考えられる。

また、篇序には讚辭に近い意味合いもあるようである。抑も篇序自身讚辭の鏤められた序の中に置かれていたのであるから、當然のことではあるが、書物の末尾を飾る文として、また各篇の意義を説くものとして、各篇を讀んでいるのである。「史記」の場合、世家の篇序に特にその傾向が強い。

太伯避歷、江蠻是適、文武攸興、古公王跡。闔廬弑僚、賓服荆楚、夫差克齊、子胥鴟夷、信詔親越、吳國既滅。嘉伯之讓、作吳世家第一。

太伯 歷を避け、江蠻 是れ適く。文・武の興る攸、古公王の跡なり。闔廬 僚を弑し、荆楚を賓服す。夫差 齊に克ち、子胥 鴟夷となり、詔を信じ越に親しみ、吳國 既に滅ぶ。伯の讓れるを嘉し、吳世家第一を作る。

吳世家は闔廬と夫差の時代に紙幅の半ばが割かれているのだが、この二王については「荆楚を賓服し……齊に克ち、……滅んだ」という史

實を記すのみで、非道な態度に對して強い批判はなされていない。かえって、開國の祖として初めに僅かに觸れられる太伯の國讓りの話を、「吳世家第一を作る」理由として擧げている。

吳世家のみならず、三十世家は言うまでもなく殘虐な事件が多く記されているのだが、世家の篇序では十七篇で「嘉す」という語を用いて、その篇を撰した理由が述べられている。これほど顯著なのは世家の篇序のみに見られるのだが、この吳世家と同じく些か無理に「嘉する」理由を付け加えているところがある。續く齊世家が「父の謀を嘉し、齊太公世家第二を作る」と、霸者桓侯ではなく、師尚父呂尚を讚え、管蔡世家は「仲の過ちを悔いるを嘉し、管蔡世家第五を作る」とその名の二度しか見えない蔡仲を讚えている。そして逆に批判的な語を「史記」の篇序全體から探しても見當たらず、ここに擧げた「仲の過ちを悔いる」といった語の方が、蔡仲の父蔡叔に「過ち」のあったことを暗に批判しているように思える。やはり書物の末尾を飾り、各篇の意義を説く文として、各篇を讀んでいると考えてよいであろう。このような傾向は世家で特に強いが、他の部分からも窺うことはでき

2、**「法言」序**

「法言」は語録の體をなしており、「史記」や他の諸子の書に比べ、各篇の主旨が明確ではない。それは「論語」に象り著された結果、「論語」に似て雑多な語録集の觀を呈しているためと考えられる。³⁾ま

た十三篇の篇名が、内容に合わせて付けられたのではなく、『論語』に
做い篇首の語から取っていることも、各篇の主旨をわかりにくくさせ
ている。このような書にとつて、篇序の存在はきわめて重要である。
撰者楊雄の執筆意圖、各篇編纂の目的が窺えるからである。

『法言』の篇序は末尾の孝至篇の後に續けて付され、篇序の中では唯
一獨立した篇をなしていない。文體は『史記』篇序同様、四字句が中
心ではあり、時に四字以外の句を交えているが、『史記』よりはやや四
字句の占める割合が高い。内容は先に記した通り、執筆の意圖や目的
が述べられている。試みに吾子篇の篇序を見てみよう。

降周迄孔、成于王道、終後誕章乖離、諸子圖微。誤吾子第二。

周より降り孔に迄り、王道を成す。終る後 誕章 乖離し、諸子
微を圖る。吾子第二を誤す。

吾子篇の序には、孔子が「王道を成し」た後、世は大法より「乖離し」、
諸子百家が思い思いの道を目指すようになった、とある。つまり吾子
篇は、諸子が孔子の道より逸れ、勝手な言動を行なったことを是正す
るために執筆された、この序から理解できる。

確かにこの篇には「古者 揚（朱）墨（翟）路を塞ぐ。孟子 辭し
て之を闢くこと廓如たり。後の路を塞ぐ者有り。竊かに自ら孟子に比
す」のように、諸子の書を退けようとする章が間々ある。だが一方で
は辭賦を論じて、「童子は彫蟲篆刻す。……壯夫は爲さざるなり」と諸
子の弊害とは無關係に思われる章もある。つまり篇序に言う意圖から
は、やや外れて見える章が確かにあるのである。だがそれは『法言』

が論文體ではなく、語録集という形式を採用した時點で、避けがたい
問題であつたように思われる。かえつて、このように篇全體の主旨が
不明確になり易いのを解決するために、篇序が置かれたのではないだ
ろうか。このような點で『法言』の篇序は、きわめて有効に作用した
例と言えよう。⁴⁾

また『法言』の篇序には「芒芒」「煌煌」といった重言、「忽恍」「倥
侗」のような雙聲・疊韻の語が、全體の字數の割に多く、語彙の豊か
な楊雄らしく裝飾性も疎かにされてはいない。

3、『漢書』敘傳

『漢書』敘傳は『史記』太史公自序とほぼ同形式であり、篇序は敘傳
の後半部を占めている。『漢書』の篇序は、最後の敘傳篇の篇序が三字
二十句であるのを除き、全てが四字偶數句で記されている。その上、
重言がきわめて多く、小論が取り上げられている四篇の篇序の中では、最
も雕琢の凝らされたものである。それは既に小論の一章に挙げた文
（帝）紀の序からも窺える。その第一句「太宗 穆穆として、允恭に
して玄默」の句には、「穆穆」という『毛詩』を典據とする重言や、
「允恭」という『尚書』の語が用いられている。⁵⁾このような典據のあ
る語は、他の篇序にも用いられているが、『漢書』敘傳ほど多用してい
るものはない。

文章の裝飾性という點で、篇序の中ではこの『漢書』の篇序が一つ
の到達點に達していると思う。その證しとして、この『漢書』の篇序

だけが『文選』に選録されていることが指摘できる。『文選』史述贊は四篇の文を選んでいるが、そのうち三篇は『漢書』の篇序から取られ、残る一篇は『後漢書』の傳贊である。他の篇序が全く顧みられず、『漢書』のものだけが三篇も收められているということは、『漢書』にはそれだけの價値が認められていたと言うべきであろう。^①

内容の特徴としては、これまでには見られなかった非難の語を記していることがあげられる。例として、次の游俠傳・佞幸傳を見てみたい。

開國承家、有法有制、家不臧甲、國不專殺。矧乃齊民、作威作惠、如台不匡、禮法是謂。述游俠傳第六十二。

國を開き家を承くるに、法有り制有り、家は甲を臧めず、國は殺を專にせず。矧んや乃ち齊民には、威を作し惠を作すをや。如台ぞ匡さずんば、禮法 是れを謂はんや。游俠傳第六十二を述ぶ。

彼何人斯、竊此富貴。營損高明、作戒後世。述佞幸傳第六十三。

彼 何人ぞ、此の富貴を竊む。高明を營損せしむれば、戒めを後世に作す。佞幸傳第六十三を述ぶ。

游俠傳は「法有り制有る」べきところを、「齊民」でありながら「威を作し惠を作す」と、游俠の不法性を非難した後、禮法をもってこれを匡すべしと主張している。佞幸傳は「富貴を竊み」高明なる皇帝を惑わした罪を指彈し、戒めとして撰したと言う。『史記』にも游俠・佞幸傳はあるが、その篇序では游俠を「義者も取ること有り」、佞幸を「能も亦た各おの長ずる所有り」と、それぞれに取るべき點を讀んでいる。

この差は司馬遷と班固の執筆態度の違いではあるが、特に篇序において顯著にあらわれていると言えよう。

4、「潜夫論」敘録

『潜夫論』三十六篇の最終篇が敘録で占められている。小論一章で示した通り、總敘の後に三十五篇の篇序が列ねられている。その文は一篇を除き、全て四字八句で構成されているが、擬態語はおろか對句さえも多くはなく、雕琢が凝らされているとは言い難い。内容は『法言』の篇序に似て、執筆の意圖や目的を説いている。ここでは問答體の釋難篇の序を見てみよう。

論難横發、令道不通。後進疑惑、不知所從。自昔庚子、而有貴云。予豈好辯。將以明眞。故敘釋難第二十九。

論難 横發すれば、道をして通ぜざらしむ。後進 疑惑し、從ふ所を知らず。昔より庚子、云ふを貴ぶこと有り。予 豈に辯を好まん。將に以て眞を明らかにせんとすればなり。故に釋難第二十九を敘す。

全て四字句から成り立っているが、平易な語が多く、その意は明瞭である。この篇は庚子ほかの人物が潜夫に難問を問ひ、潜夫がそれに答えるのだが、この篇序では、辯を好まない潜夫が庚子らにせがまれての結果としている。實際にそのような問答があったのかどうか、ことの眞偽はもとより不明だが、辯を好まない王符が「眞を明らかにせんと」奮い立っているさまが、思い浮かぶようである。

このように『潜夫論』の篇序は、他の三篇に比べ、どちらかと言えば素朴な序であるように思われる。

おわりに

最後に検討の結果をまとめてみたい。

まず篇序は全篇目を記し、後の目録・目次の役割を擔っていたが、内容としては、各篇の梗概のほかに執筆の経緯や目的、更には讃辭を加えていた。この讃辭は結局、自らが著したものに向けられているのであるから、自讃ということになる。著者が自身で著したものを自讃するのであれば、雕琢を凝らした表現を用いたこともなつたであろう。

それは篇序の内容が梗概や執筆の目的など、各篇の中に既に表されていたものの場合でも同様であろう。雕琢を凝らした結果が四字句を多用し、對句や典故、重言や雙聲・疊韻の語を使用することに繋がったと思われる。篇序の到達點としては、『文選』に選録された『漢書』のものが、『文選』編纂當時は評價が高かつたことと推測される。

篇序は以上のようなものとして秦漢期に著されたが、現在では目次としてしか残っていない。その理由の一つとしては、各篇の本文と篇序の内容が重複したためと考えられた。確かに本文と重複する篇序を雕琢を凝らして著すのは、手間である割に、読者の需要は低かつたであろう。にもかかわらず篇序を著したのは、著者が雕琢を凝らした語や自讃を交えて、その書の価値を高めようと企圖したためではなかつただろうか。それ程この時期の著作には、著者の自作に對する自負や

思い入れが深かつたのではないかと考えている。そしてこの自負や思い入れの深さを、篇序を含んだ序全體の存在があらわしているように思われるのである。

また、篇序が消滅した理由には、著者の自負や思い入れのあり方が變化したこともあるのではないかと考えている。時代が下り著作というものの自體のもつ價值が變化するのに伴い、著者の自作に對する自負や思い入れのあり方も變つたと思われるのだが、そう結論するには他に検討すべき問題も多いので、今後また機會を改めて考えてみることにしたいと思う。

註

(1) ここでは辭賦の序や『毛詩』『尚書』の序は除外した外、序の執筆状況の不明确的な『急就篇』、『逸周書』、『中論』も除いた。なお、序字を冠していないので小論の對象から省いたが、以下の五篇も實質的には序と考えている。『莊子』天下、『荀子』堯問、『淮南子』要略、『鹽鐵論』雜論、『論衡』對作。

(2) 『法言』は全十三篇あるが、淵齋篇の序は音義に引く柳宗元に後人のものと言われているので十二篇とし、『漢書』は全百篇だが惠紀第二と高后紀第三が一編に併わされているので九十九篇である。

(3) 『法言』序は、『法言』末尾に付されたものと『漢書』揚雄傳に收められた揚雄自序のものとがある。兩者には若干の文字の異動があり、『漢書』には篇序の前に『法言』全體に對する總序がある。『論語』に象りの語はこの總序に見える語である。本稿は書物に付された篇序を検討對象としているので、『法言』末尾のものに據ることとする。なお『揚雄自序』に關しては、拙論『漢書』揚雄傳所收『揚雄自序』をめぐって(『學林』二二八・二九合併號)がある。

- (4) なお、『法言』末尾の篇序と『法言』の構成については、町田三郎『秦漢思想史の研究』(三四六頁以下)に論考が見えるので参照されたい。
- (5) 『毛詩』大雅・文王に「穆穆文王、於緝熙敬止」とあり、毛傳に「穆穆、美也」と言う。また『尚書』堯典に「允恭克讓、光被四表、格于上下」とあり、孔傳に「允、信」、孔穎達疏引鄭玄に「不懈於位曰恭」と言う。
- (6) なお、『文選』の選録規準に關して、清水凱夫『「文選」編纂に見られる文學觀―「頌」・「上書」の選録を中心として―』(『立命館文學』第五二六號)他があり、この『漢書』の篇序については、福井佳夫「班固の『漢書』について」(中京大學文學部紀要三二―一)があるので参照されたい。

The Preface and The State of Writing for Qin and Han Period

Tatsuo Kase

Abstract: This paper examines the prefaces added respectively to the books in Qin and Han Periods, and attempts to examine the state of writing books in those periods. The prefaces in Qin and Han Period took various forms, and this paper comments on the prefaces attached to each section of the books. These prefaces played roles of a list or a table of contents; a written summary; an explanation of the purpose of writing; and a self-praise of the section of a book. A lot of four letter phrases and various rhetoric were used in writing these prefaces. Although this kind of prefaces ceased to exist soon after, probably because the contents of the prefaces were often repeated in the texts of the books, the authors in Qin and Han periods seem to have written these prefaces, without fear of repetition, in order to enhance the value of the books. It appears that the authors in those periods were highly self-conceited, and that these prefaces are indications of their self-conceit and affection for their own works.

Key words: preface, Shiji Tai shi gong zi xu (『史記』太史公自序), Fa yan xu (『法言』序), Han shu xu zhuan (『漢書』敘傳), Qian fu lun xu lu (『潛夫論』敘錄)